

## Y-3-13

### ユニフォーム2色制による勤務時間の見える化 ～当病棟における働き方改革～

高知赤十字病院 救命救急センター病棟

○中川 幸、野本 由記、梅原 初枝

【はじめに】高知赤十字病院は三次救命救急センターで緊急入院や急変対応など看護師の業務は多様である。勤務交代前後の医師からの指示受け、処理等の対応も多く、時間内に処理できない事で時間外労働を余儀なくされている。当病棟の勤務体制は、二交代と三交代の混合勤務体制をとっている。また、子育て世代のスタッフが多くの病棟の26%を占めており時間外労働は避けたい現状である。そこで、先行事例を参考にユニフォーム2色制を導入し、勤務時間を見える化した事で時間外労働の削減、意識改革に繋がることができたか調査したので報告する。【目的】ユニフォーム2色制を導入し時間外労働を削減することができる。【方法】夜勤帯と日勤帯のユニフォームを2色制にする為、全職員に支給されている白衣と、救命センター病棟の看護師が着用しているスクラブを使用した。2022年1月から開始し、取り組みによる意識調査と効果の調査の為、医師、看護師にアンケートを行った。【結果】今回の取り組みで、夜勤帯と日勤帯の別をつける事により医師からの時間外の指示受けの減少、定時に終業できる等、他スタッフから配慮を受けられる様になった。定時での業務終了の意識を高めると共に、他の業種からもひと目で勤務時間内か、時間外なのかを明確にでき、残業中に不要な声掛けが減り、医師も指示を出す際に誰に指示を出したらいいのか分かりやすくなった。【結論】働き方改革の一環として、ユニフォームを2色制にした事で、時間外削減への意識の向上がみられた。追加コストをかけたが当院ならぬ方法でユニフォームの2色制を導入し、時間外労働削減への意識の向上とコスト削減効果を認めた。今後は継続して時間外労働の削減を行い、ワークバランスのとれた病棟を目指していく。

## Y-3-15

### RPAを導入してからの稼働実績について

旭川赤十字病院 事務部 デジタル推進室

○長谷川 薫、阿部 直之

【背景】働き方改革の取り組みのひとつとして、2019年度より株式会社アシリラ社のRobotic Process Automation (以下、RPA)「ロボオペレーター」を導入した。初年は事務が代行入力を行っていた病名登録をRPA化することを目標とし、情報システム課が対応した。翌年には新たな部署「デジタル推進室」(メディカルスタッフ1名、事務職員1名2名)を立ち上げ、更なるRPAの作成、業務のペーパーレス化実施などを目標とし、2021年度までの実績を報告する。【方法】主に事務職が作業している業務の中から、RPA化に向く作業の洗い出しを行い作成した。業務のRPA化は各課担当者数回の打合せを行い、作成後も修正・要件変更などを行う場合もあったが、テストを繰り返しながら稼働に至った。当初は事務職員だけが作成経験者のため、メディカルスタッフにも操作方法を習得してもらい作成体制を強化した。結果RPA作成件数は2020年度、22件。2021年度は55件、2021年度RPA稼働時間は2,141時間25分と達成することができた。その他、デジタル推進室ではリモート研修会などのためZoom導入・操作対応、電子会議(ペーパーレス会議)システムの導入(準備中)の実施を行った。【考察】RPA作成者が増えたことで作成件数は目標から毎回大幅に達成することができた。また、多職種の人材が介入することで、放射線レポート未読通知のRPA化など目標の違うところから、作成の幅が広がり多職種の参加が有益であると考え、RPA稼働時間の時給換算、RPA化業務内容をみると、働き方改革の取り組みとしては一定の効果を実施できたと考え、今後は、増えるRPAの管理を効率的に稼働させるための計画が必要である。タスクスケジュールなどを利用して夜中に実施することや日中はRPA作成のための時間確保などが挙げられる。RPAは、比較的容易に作成できるが安定した稼働をさせるには何度も試行錯誤を要する場合もある。

## Y-3-17

### RPA (Robotics Process Automation) による業務改善

北見赤十字病院 医事課<sup>1)</sup>、診療放射線科<sup>2)</sup>

○林 健二<sup>1)</sup>、中島 勲<sup>2)</sup>

【目的】医事課はレセプト業務等による残業時間が多い課であった。これまで多様な業務改善を進めてきたが、明確な改善は難しかった。課題として、慢性的な人材不足、システム間連携不足による会計作成時間の遅延、膨大な確認・入力業務等がある。改善には、人員補充、システムのカスタマイズが望ましいが、多額の費用を要するため困難であった。RPAは単純な業務を代行でき、人と異なり24時間稼働できるため、人材不足の解消、業務の効率化が期待できると判断し、導入を検討した。【方法】RPAは、人が実施している業務をソフトウェアロボットへタスクシフトすることを可能にする。電子カルテベンダー等に依存しないため、PCで作業する業務には対応できる。RPA化するためには、移行できる業務を選定し、業務分析・業務方法を明確化させ、RPAシナリオを作成する。RPA化した業務として以下2例をあげる。  
1.電子カルテへの病名代行入力(一部手動) レセプトチェックシステムで病名漏れとして検出された情報を加工し、RPAが電子カルテに病名を代行入力する。  
2.電子カルテのバイタル情報を会計へ代行入力(全自動) 電子カルテに入力されたバイタル情報を抽出・加工し、RPAが電子カルテや医事システムに代行入力する。【結果】RPAはカスタマイズとは異なり、標準的な運用をサポートする効果が高い。時間を要する業務をRPAが代行することで、費やしていた時間をより専門知識を要する業務にシフトすることができ、負担軽減、人的ミスの軽減、生産性向上に繋がった。RPAだけではなく、プログラミングを併用することで、より高度・複雑な業務にも対応することができ、事務作業の改善・効率化に留まらず、医療安全面の活躍も期待されている。他部門から多種多様な相談が寄せられていることから、デジタル技術を活用した業務改善活動を継続する。

## Y-3-14

### RPAの導入による業務の省力化と費用対効果

諏訪赤十字病院 医療情報課

○太田 正紀、金子 貴樹

【はじめに】当院では重点目標の1つにITの推進が掲げられている。担当課として日々業務の軽減に繋がるシステムの導入を模索している。その中で当院が昨年度に導入したRPAが1年を経過したため、その経過及び課題等について報告したい。【導入の経緯】病院には電子カルテをはじめ多くのシステムが稼働している。これらがデータ連携しているところはよいが、Aシステムのデータを抽出、紙に出力してBシステムに手入力するなどの、いわゆる「単純な狭間業務」にスタッフが多くの時間を割かれているため、RPAがこの狭間を埋めることができるのではと考え導入を検討した。RPAにはサーバ型とクライアント型とあるが、スモールスタートで評価を行うため、まずは開発用、実用用のライセンス各1式を購入した。メーカーによる研修を1週間ほど実施し、当初から目をつけていた「看護勤務スケジュールシステムから勤務実績データを出力し就業管理システムに取り込む業務」をシナリオ化した。【結果】上記のシナリオ化により担当スタッフ(1名)が月に9時間かけていた業務が立ち合い不要で自動化され、更に回数を増やすことで精度アップに繋がった。なお、担当部署には結果ログを確認してもらい、業務の責任部署はシステムではないことを明確にした。現在では4部署で10業務を自動化、業務削減時間は700時間/年、人件費は約140万円/年となっている。【課題と今後】継続(拡大)のための体制づくりと要員のスキルアップ、サブスクのライセンス料と削減時間(費用)による費用対効果、業務システム入れ替えによるシナリオメンテナンスが発生した際は担当部署に業務を戻すなどの課題もあるが、業務の省力化に繋がるよう今後も取り組んでいきたい。

## Y-3-16

### 当施設におけるRPA (Robotic Process Automation) を用いた業務効率化の取り組み

日本赤十字社北海道ブロック血液センター 製剤部<sup>1)</sup>、  
日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター<sup>2)</sup>

○秋野 光明<sup>1)</sup>、永井 猛<sup>2)</sup>、内藤 祐<sup>1)</sup>、菊池 博也<sup>1)</sup>、  
石原 徹也<sup>1)</sup>、中島 剛史<sup>1)</sup>、近藤 知<sup>1)</sup>、館石 高広<sup>1)</sup>、  
会川 勝彦<sup>1)</sup>、紀野 修一<sup>1)</sup>

【目的】働き方改革関連法の施行及び生産年齢人口減少に対する一方策として、勤務環境の改善に向けた業務の効率化が急務とされている。我々は、2020年度から人間が行っている定型的なパソコン操作をソフトウェアのロボットにより自動化させるRPAの導入を開始し、同時にクリエイターの育成に取り組んだので報告する。【方法】2020年4月から北海道ブロック血液センター(札幌市)に、事務系と技術系の職員各2名からなるRPA推進チームを設置し、現行業務と兼務する形でRPA関連情報の収集やソフトウェアの選定、クリエイター育成のための寺小屋の開設を進めた。2021年度はRPA普及期として施設内の職員を対象とした寺小屋をスタートさせ、プログラミングの基礎やRPAの得意分野、特徴を理解する場とした。本年度は発展期として旭川、釧路、函館の施設へRPAの検討対象を広げた。【結果】RPA開発環境はUiPathを選択した。寺小屋の教材として全16講義(1回90分)のシラバスを作成し、全ての教材をGoogle Classroomに集約して、受講者へのテキスト配布や確認テストを行った。講義内容はYouTube配信することで受講者の復習を可能とした。過去2年間で5部門22名の職員が寺小屋を講義し、2020年度では10種、2021年度は13種のRPAを導入、うち7種が基幹システムへのデータ入力に係る内容であった。現在新たに7種のRPAを検討している。【考察】RPAの導入は業務を見直す切っ掛けとなり、RPAシナリオは属人化されていた業務の標準化・平準化に役立った。寺小屋はクリエイターの育成に重要な役割を果たしたが、受講者の時間確保が課題とされた。今後、RPA以外のデジタル技術と組み合わせることで、更なる業務の効率化を進めたい。

## Y-3-18

### RPAとExcelマクロを使用した業務改善

旭川赤十字病院 事務部・情報システム課

○藤田 英晃、佐藤 寛剛、呉 亮太

【はじめに】「働き方改革」を進めるうえで「業務の効率化」は欠かせないテーマだが、人による作業は時間がかかりミスも生じやすい。作業の「時間短縮」と「精度向上」を求めRPAとExcelマクロを導入した取り組みを紹介する。【目的】電子カルテ(当院は「EGMAIN-GX(富士通製)」を使用)のマスタ作成・登録作業は多くの時間を費やす。この作業にRPAとExcelマクロを適用し、半自動化する事で業務効率化を図る。【方法】対象マスタは、複雑な作業が無く作業件数が多い「バーコード材料マスタ」とし、作業の「時間短縮」を図るため、フリーソフトを用いてマスタ作成・登録作業のキー操作・マウスを記録させ、自動的に再実行するRPAを作成した。また、作業の「時間短縮」に加え「精度向上」を図るために、登録したマスタ内容の整合性をチェックするExcelマクロを作成した。これらが本稼働した2019年4月から2022年3月末までのマスタ作成・登録件数5,028件で業務改善されたか検証をおこなった。【結果】マスタ10件分の作業時間は、従来の入力方法では約7分30秒だったが、RPAとExcelマクロでは約1分30秒であった。総時間を比較した結果、従来の入力方法では約63時間に対し、RPAとExcelマクロは約13時間であり、今回の導入により作業時間が約50時間も短縮され、入力誤りや再登録も発生しなかった。【考察】マスタ作成・登録作業は、手入力や目視による確認が多く負担が大きいため、今回の結果は業務改善に大きく繋がった。また、フリーソフトを用いて作成したことでもコストを抑えることが出来たという利点も大きい。RPAとExcelマクロの導入は、少ないコストで業務改善ができると考えられる。現在、薬剤・利用者・文書作成マスタへの導入を検討しており、更なる業務改善を図る。

10月6日(木)  
要望演題

抄録